

第7節

幼児の発達状況

生活習慣に関する発達は、未就園児よりも幼稚園児のほうが、また、人とのかわりに関しては、友だちの多いほうが発達の早い傾向がみられた。そして、言語に関する発達については、絵本やワークなど、子どもの周りの文字環境が豊かなほうが発達の早いことがわかった。

今回から新たに、子どもの発達に関する項目として、おもに「生活習慣に関する発達」「人とのかわりに関する発達」「言語に関する発達」の3領域について調査した（ただし、対象年齢は1歳以上）。また、項目を作成するにあたり、『津守式乳幼児精神発達質問紙』（津守真、稲毛教子、磯部景子著、大日本図書）と『幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に』（柏木恵子著、東京大学出版会 1988年）を参考にした。

●生活習慣に関する発達

幼稚園児のほうが、未就園児よりも生活習慣を身につける時期が早い傾向に

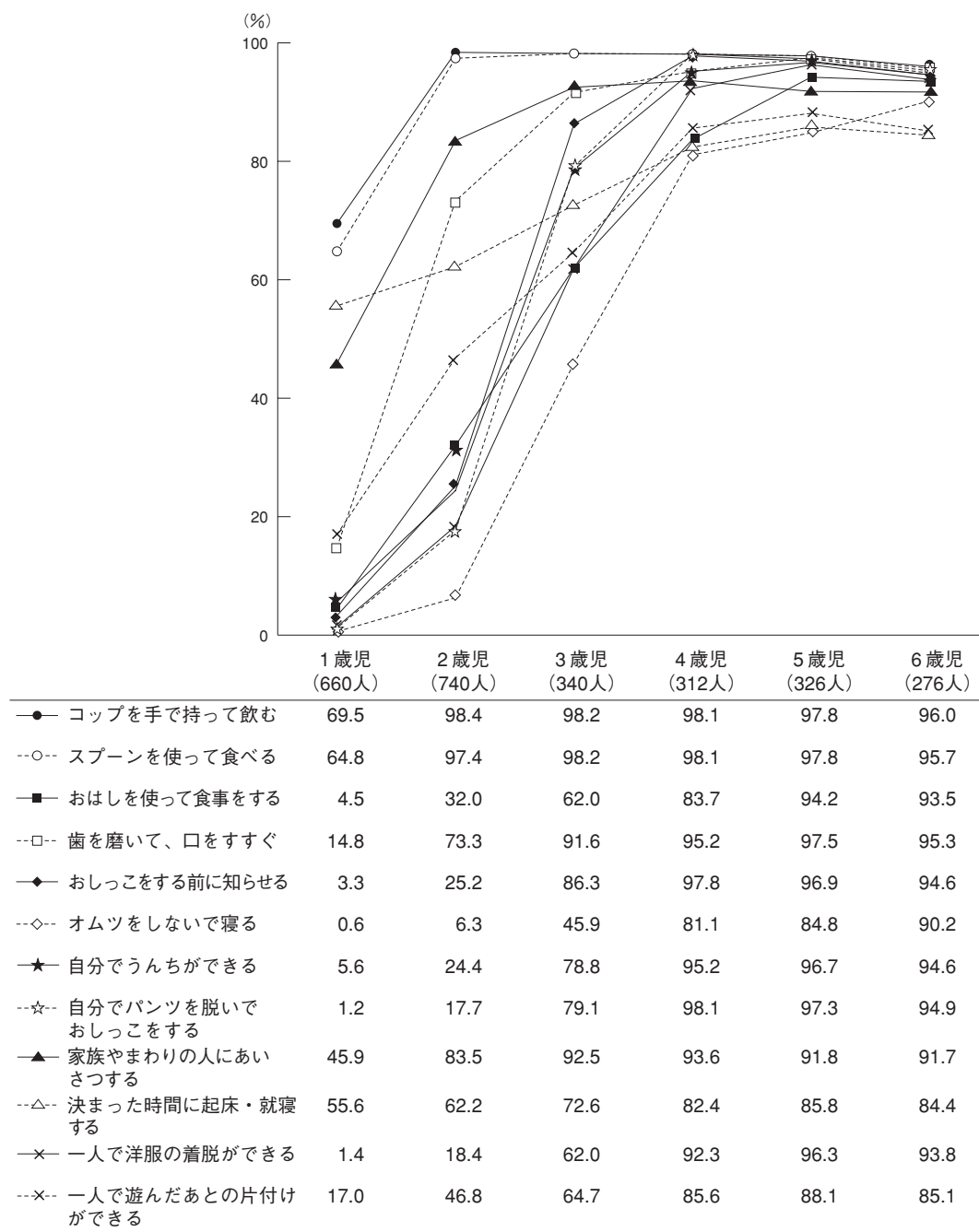
まず、生活習慣に関する各発達項目について、「できる」と答えた割合を、年齢別に比較した（図1-7-1）。4歳児になるとすべての項目の課題を、8割以上の子どもが「できる」ようになる。しかし3歳児の時点では、「おはしを使って食事をする」が62.0%、「オムツをしないで寝る」45.9%、「一人で洋服の着脱ができる」62.0%、「一人で遊んだあとの片付けができる」64.7%の子どもが達成できているにとどまる。3歳児という年齢で、

課題ができるかどうかには差がある背景の1つには、家庭外での集団生活を開始しているかどうか、つまり、就園しているかどうかの違いがあげられるのではない。

本調査の実施時期に関連し、幼稚園に就園している子どものほとんどが3歳11か月以上であり、3歳10か月までの子どものほぼ9割が未就園児である。よって、就園状況と発達課題との関連を分析するには、この点を考慮する必要がある。

そこでまず、3歳11か月を基準とし、前後の月齢を4か月単位で区切って、課題達成率の比較を行った結果、とくに「一人で洋服の着脱ができる」子どもの割合が月齢とともに増えることがわかった（図1-7-2）。さらに、3歳11か月～4歳2か月までの幼稚園児と未就園児との比較を行ったところ（保育園児については、サンプル数が少ないために除外した）、いずれの項目においても、幼稚園児のほうが未就園児よりも課題の達成率が高い傾向がみられた（図1-7-3）。ただし、幼稚園児の平均月齢が48.5か月、未就園児が47.9か月と若干未就園児のほうが低いことから、このことによるいくらかの影響も考えられる。

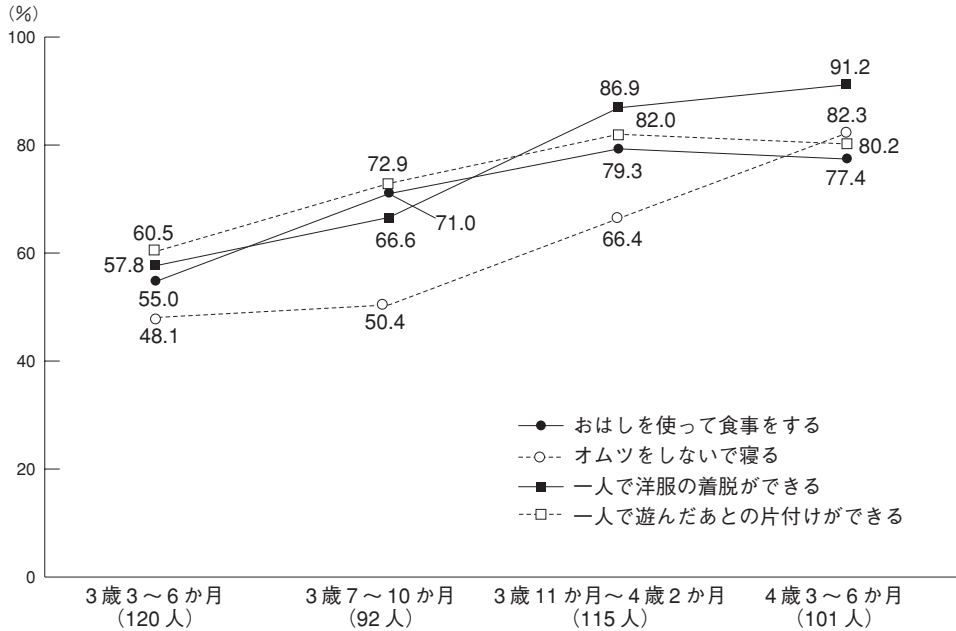
■図 1-7-1 生活習慣に関する発達 (子どもの年齢別 05年)



注1) 「できる」の%。

注2) 満1歳以上の幼児をもつ保護者の回答のみ分析。

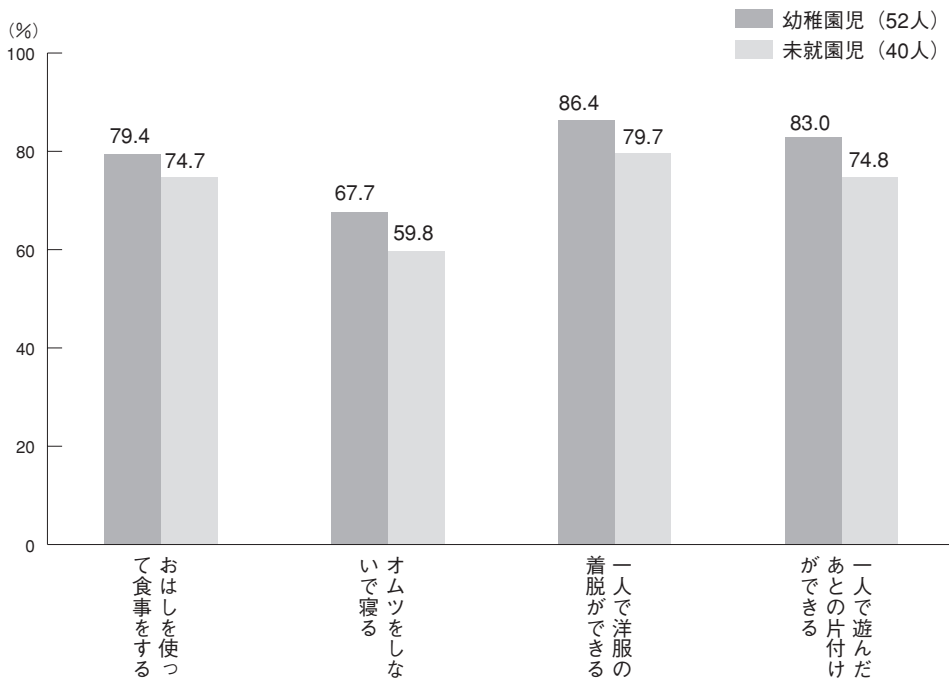
■図 1-7-2 生活習慣に関する発達 (子どもの月齢別 05年)



注1) 「できる」の%。

注2) 生活習慣に関する12項目のうち4項目を図示した。

■図 1-7-3 生活習慣に関する発達 (3歳11か月~4歳2か月 就園状況別 05年)



注1) 「できる」の%。

注2) 生活習慣に関する12項目のうち4項目を図示した。

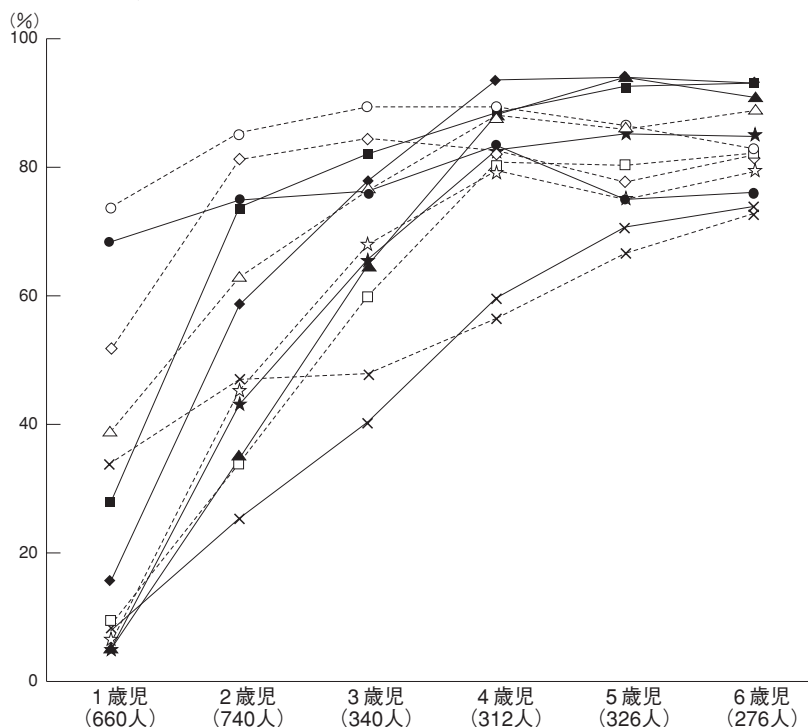
● 人とのかかわりに関する発達

未就園児は、友だちの数が多いほうが
発達課題の達成率が高い

つづいて、人とのかかわりに関する発達課

題について、年齢ごとの達成率を示したのが
図1-7-4である。ここから、4歳児になると、「自分の感情をすぐ爆発させずに抑えられる」「失敗したりうまくいかななくても、すぐあきらめない」以外の課題を、ほぼ8割の

■図1-7-4 人とのかかわりに関する発達（子どもの年齢別 05年）



	1歳児 (660人)	2歳児 (740人)	3歳児 (340人)	4歳児 (312人)	5歳児 (326人)	6歳児 (276人)
● おとなの顔色をうかがいながらいたずらをする	68.4	74.9	76.3	83.4	75.0	76.1
--○-- 他の子どもとおもちゃの取り合いができる	73.8	85.4	89.4	89.4	86.5	82.9
■ 言い聞かせると欲しい物をがまんする	27.9	73.8	82.1	88.5	92.6	93.1
--□-- 友だちとけんかをすると言いつけに来る	8.8	34.0	60.0	80.8	80.3	82.2
◆ おもちゃなどを友だちと順番に使う	15.6	58.6	77.9	93.6	94.0	93.1
--◇-- 嫌なことをはっきり嫌と言える	51.6	81.2	84.5	82.6	77.7	81.9
★ 入りたい遊びに「入れて」と言える	5.0	43.1	65.7	82.7	85.2	84.8
--☆-- 自分の考えや意見を自分から言える	6.0	45.3	68.0	79.5	75.0	79.3
▲ ルールを守って遊ぶことができる	5.0	34.7	64.8	88.2	94.0	90.9
--△-- 「いけない」と止めると、やめられる	38.9	62.9	76.4	88.1	85.9	88.8
× 自分の感情をすぐ爆発させずに抑えられる	7.9	25.4	40.4	59.7	70.7	73.9
--×-- 失敗したりうまくいかななくても、すぐあきらめない	34.0	47.0	47.9	56.5	66.6	72.8

注1) 「できる」の%。

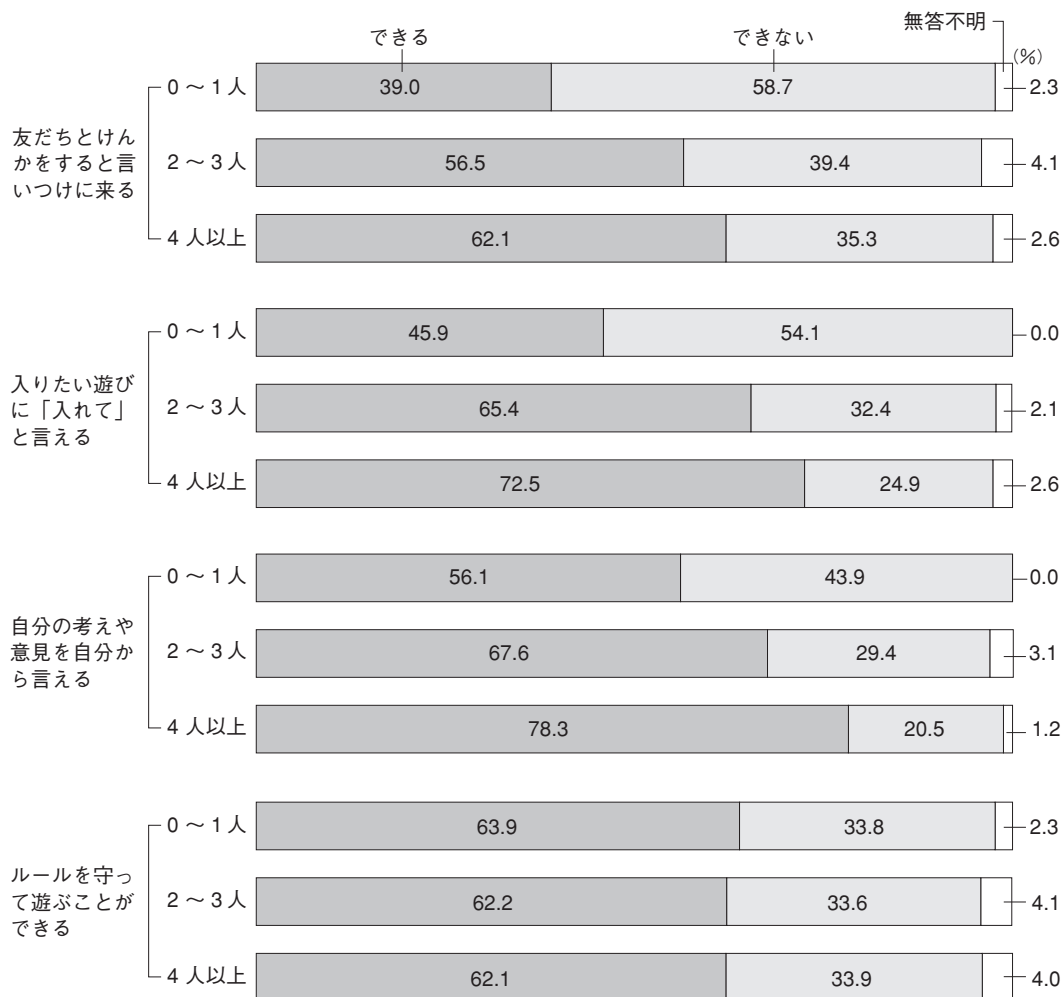
注2) 満1歳以上の幼児をもつ保護者の回答のみ分析。

子どもが「できる」ようになることがわかる。ただし、この2つは、6歳児になっても7割程度の達成率と低いので、子どもによって比較的個人差の大きい項目であると考えられる。これら以外では、3歳児の時点では、「友だちとけんかをすると言いつけに来る」「入りたい遊びに『入れて』と言える」「自分の考えや意見を自分から言える」「ルールを守って遊ぶことができる」の4項目で「できる」割合は6割台で個人差があるようだ。これら4項目は、子ども同士のやりとりを通じ

て達成される課題であるといえる。幼稚園・保育園に通う子どもたちは、日常の保育のなかで友だちとのやりとりを経験しているが、未就園児たちはどうなのであろうか。やはり友だちがたくさんいるほうが、人とのかかわりにおける発達課題も早いうちに達成できるのではないだろうか。

まず、3歳の未就園児について、「一緒に遊ぶ友だちの数」との関連を分析した(図1-7-5)。未就園児のほとんどが、3歳11か月までに集中しているので、ここでは3歳

■図1-7-5 人とのかかわりに関する発達(3歳未就園児 友だちの数別 05年)



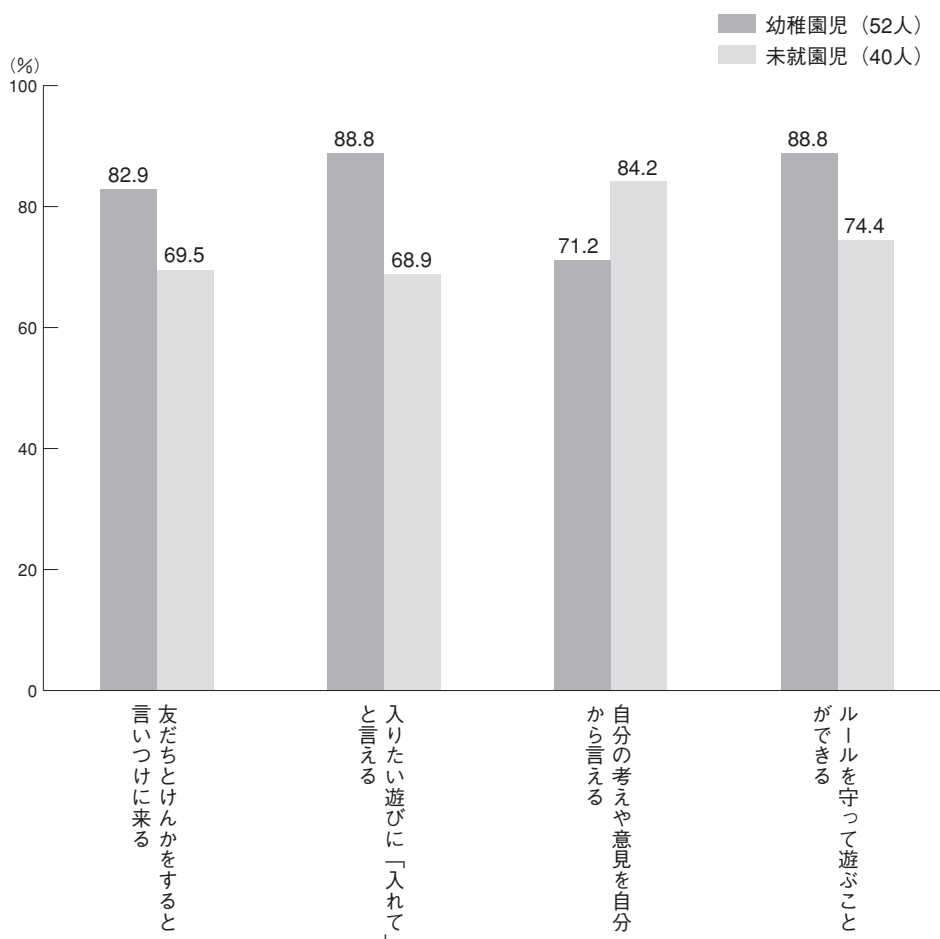
注1) 「0～1人」は、一緒に遊んでいる友だちが「0人」「1人」と回答した人、「4人以上」は「4～5人」「6人以上」と回答した人。「特に決まっていない」および無答不明の人は、図から省略した。

注2) 人とのかかわりに関する12項目のうち4項目を図示した。

という年齢を基準にした。その結果、友だちの人数の多いほうが、各課題の達成率が高い傾向にあったが、「ルールを守って遊ぶことができる」では差がなかった。これは未就園児の友だち関係が、幼稚園・保育園のような集団生活のなかの枠組みにおけるそれとは質的に異なるためではないだろうか。なお、2歳の未就園児についても同様に、友だちの数との関連を分析したが、友だちがいるかないかで3歳児群のような大差はみられなかった（図省略）。

つづいて、幼稚園児と未就園児との比較を行った結果、「自分の考えや意見を自分から言える」以外の項目で、幼稚園児の課題達成率が高いことがわかった（図1-7-6）。子どもが自分の考えや意見を持つのは子ども同士の場面に限らず、母親や父親など、周囲のおとなに対しても向けられることなどから、このような結果が得られたものと考えられる。

■図1-7-6 人とかかわりに関する発達（3歳11か月～4歳2か月 就園状況別 05年）



注1) 「できる」の%。

注2) 人とかかわりに関する12項目のうち4項目を図示した。

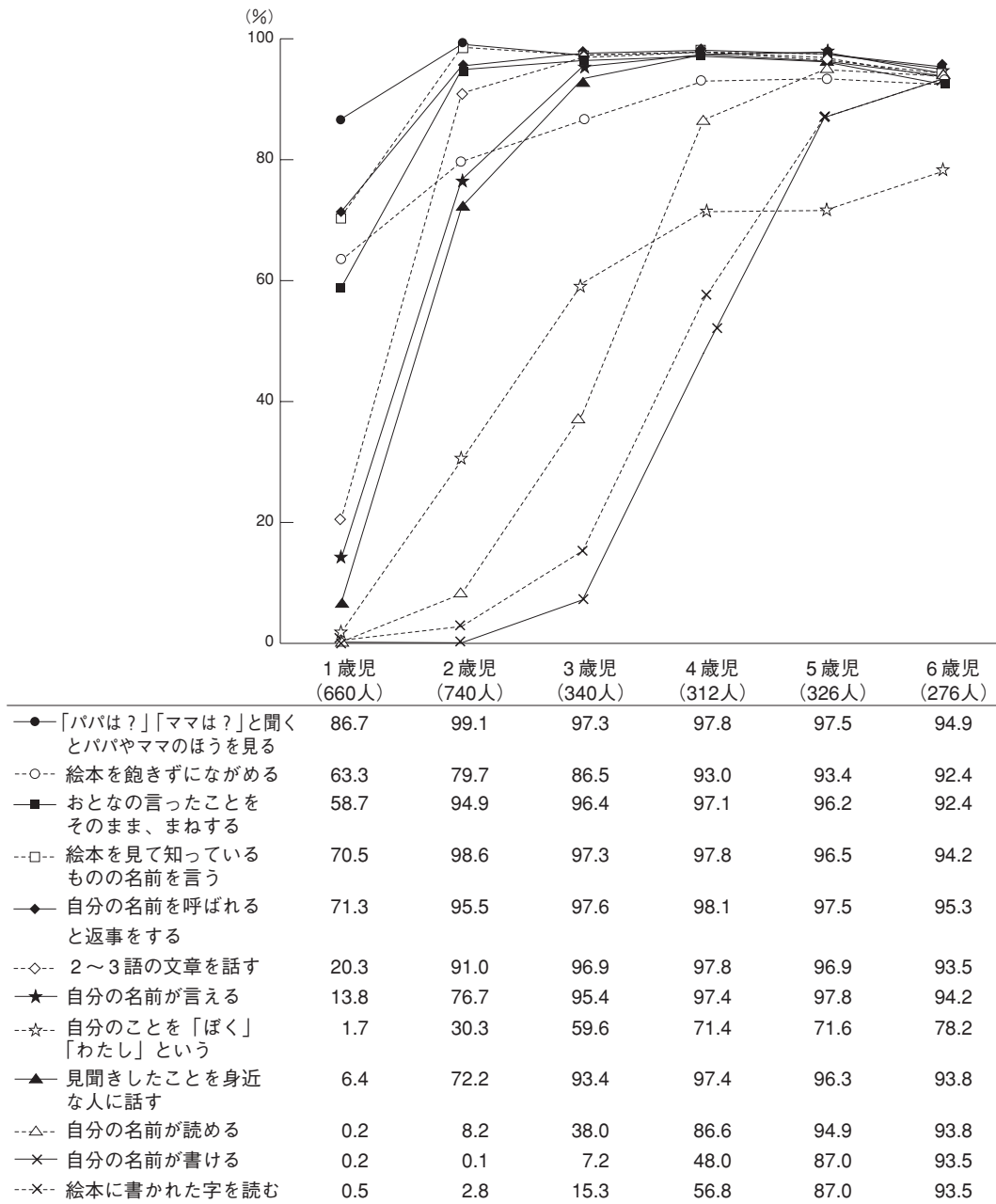
●言語に関する発達

4歳児の時点で、読み書きができる
 子どもは、ワークを多く行うなど
 文字環境が豊かである

言語に関する発達課題について、「できる」

という割合を年齢別に示したのが、図1-7-7である。言語に関しては、かなり早い時期から達成可能なものが多く含まれており、1歳児の時点から8割を超す達成率のみられる項目（『パパは？』『ママは？』と聞くとパパやママのほうを見る）もある。5歳

■図1-7-7 言語に関する発達（子どもの年齢別 05年）



注1) 「できる」の%。

注2) 満1歳以上の幼児をもつ保護者の回答のみ分析。

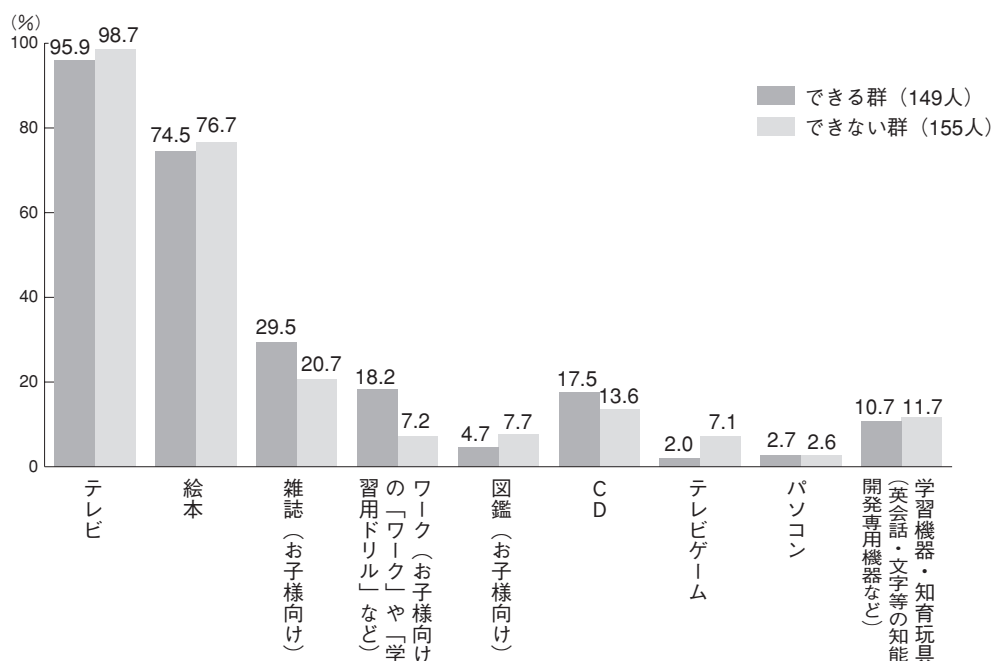
児になると「自分のことを『ぼく』『わたし』という」以外の項目で8割以上の達成率となっている。この「自分のことを『ぼく』『わたし』という」については、6歳児になっても「できる」子どもが8割に満たない。これは、自分を指す一人称が「ぼく」や「わたし」のほかにもいくつか考えられること（たとえば、「オレ」など）や、自分のことを名前で呼ぶ（「〇〇ちゃん」など）子どもが少なくないことなどが要因として考えられる。そこで、言語に関しては、4歳児の時点では5割前後の達成率となっている「自分の名前が書ける」「絵本に書かれた字を読む」について、家庭にあるテレビや絵本などの使用頻度と関連があるかどうかを分析した（図1-7-8～9）。

「自分の名前が書ける」「絵本に書かれた字を読む」について、これらができるかどうかによって、家にあるものの接触頻度に統計的

な差が認められるのか分析を行った。その結果、4歳児の時点で、「自分の名前が書ける」について「できる」群は、「できない」群よりも、ワーク、雑誌への接触頻度が高く、反対にテレビの視聴頻度が低かった（図1-7-8）。

また、「絵本に書かれた字を読む」について「できる」群では、ワークへの接触頻度が高いことが明らかになった（図1-7-9）。絵本を週にどれくらい読むかどうかや、学習機器・知育玩具をどれくらい使用するかとはともに関連はみられなかったが、1歳児では「2～3語の文章を話す」ことができる子どもは、できない子どもよりも、絵本を読む頻度が高かった（図省略）。全体的にみて、読み書きができる子どものほうが、より文字環境が豊かであるといえるだろう。さらに、字の読み書きができる子どもは、テレビゲームをする頻度も低い傾向がみられた。

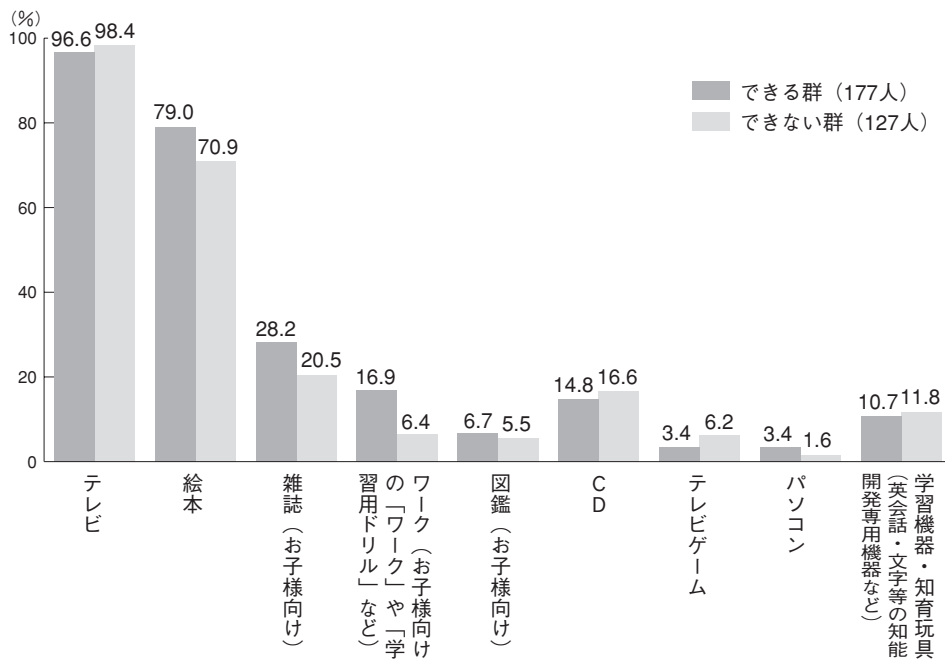
■図1-7-8 家にあるものの使用頻度（4歳児「自分の名前が書ける」別 05年）



注1) 「ほとんど毎日」+「週に3～4日」の%。

注2) 「できる群」は「自分の名前が書ける」項目で「できる」と回答した人、「できない群」は「できない」と回答した人を示す。

■図 1-7-9 家にあるものの使用頻度（4歳児「絵本に書かれた字を読む」別 05年）



注1) 「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」の%。

注2) 「できる群」は「絵本に書かれた字を読む」項目で「できる」と回答した人、「できない群」は「できない」と回答した人を示す。